

## 室生犀星論

室生犀星は自伝風の小説『抒情詩時代』<sup>註1</sup>の冒頭で、十五歳ぐらいから俳句を作り、

私は写実を主としてゐた。あるがままな情景、経験、さういふものが私の俳句の精神を深徹してゐた。

と書く。また島崎藤村の詩を読みへ心に熱を感じ、この詩人に近づくだけのものが自分にあるうかと考え込んだという。北原白秋の『邪宗門』が刊行されると、早速それを買ったことは『性に眼覚める頃』<sup>註2</sup>で書いている。犀星の作品を読んでいて、ときどき生の認識の方法に藤村を想起させられることがある。また詩語の「鋭さ」「凝縮性」(伊藤信吉)につきあたる。指摘されているように、犀星が早くから句作や詩作に傾情したことであることが知られる。既にいわれられているように、犀星の詩風には類唐的なものではなく、生命感に焼きつくような感覚で詠われる詩が多い。それだけに読者に

## 菊 地 弘

迫ってくるものを感じさせ、不撓の精神を窺わせる。しばしばとりあげられる、自画像を詠った全五十一行の詩『室生犀星氏』<sup>註2</sup>である

みやこのはてはかぎりなけれど  
わがゆくみちはいんいんたり。

やつれてひたひあをかれど  
われはかの室生犀星なり。

脳はくさりてときならぬ壯丹<sup>マヅ</sup>をつづり  
あしもとはさだかならねど

みやこの午前  
すてつきをもて生けるとしはなく

\*うつとりとあゆめるは室生犀星なり。  
ねむりぐすりのねざめより

眼のゆくあなた緑けぶりぬと

午前をうれしみ辿り

うつとりとうつくしく

\*らくいん貴族に及ぶ室生犀星なり。

\*らくいん貴族に及べども

\*ひとくれの麥をひろはんとする乞食のころ。

たとへばひとなみの生活をおくらむと

なみかぜ荒らきかなたを歩む室生犀星なり。

されどもすでああ四月となり

さくらしんじつに燃えれうらなれど

れうらんの賑はひに交はらず。

賑はひを怨ずることはなく唯うつとりと

すてつきをもて

つねにつねにただひとり

きんしん無二の坂の上

くだらむとする室生犀星なり。

\*たとへば十にもみたぬをとめぐにかんげきし

\*あけくれあたまをなやまし

\*つくづくとものおもふ

\*せんちめんたるの兒われは室生犀星なり。

\*あけくれ多きともどちら

\*ひにくを超えてしんしんといとしがり

\*まつちのれつてゐる

\*紅えんえんたるを送りくる。

ときにあしたより

とをくみやこのはてをさまよひ

ただひとり、うつとりと

息絶えむことを専念す

\*らくいん貴族の

\*せんみんの

\*われはかの室生犀星なり。

ああ四月となれど

桜を痛めまれなれどげにうすゆき降る。

哀しみ深甚にして座られず。

たちまちにしてかんげきす。

\*すてつきをもて

\*桜の下にしぬびより

\*おんみ、さぞ痛からめ

\*かんぜよ、けいけん苦節をもてけぶれるわれ。

\*青冷一魂となりたるの

\*われはかの室生犀星なり。

\*印をつけた二十一行はのち削除された。すなわちへらくいん貴族に及ぶ室生犀星なり。……と「いうだれでも容易に気づく出生に関する表現の誇張した行や、己れの強調、感傷的な情緒を詠った行を削ったことで、自画像としての密度が高まり、詩形も引き締ったといえる。木戸逸郎氏は「最も窮迫していた時代の犀星の観念的な自画像である。〈哀しみ深甚にして座られ

ず／たちまちにしてかんげきす」という唐突なこの最後の二行に矛盾した二つの心的状況と、それを引き据えた捨て身の身構えのようなものが感じられる」と評言している。

で、この詩はやつれた身で足もとも定かではなく、陰陰として、すてつきをもつて歩む詩人が、遠く希望を見据えて生を意志せんとしている姿を彷彿させてくれるように思える。また、みやこの涯をさまよう孤高の詩人であるが、強靱な生活意思をいだいて歩む姿も窺わせる。〈哀しみ深甚にして座られず〉という表現の裡には、削除したへらくいん貴族の／せんみんなの／われはかの室生犀星なり。の行で詠った、出生にまつわる宿命、心の貧しさがこめられているのであるが、詩人の本能は一瞬の閃光が走るごとく、へたちまちにしてかんげきすの躍動へ氣持を切り変えて、すてつきをもつて歩もうと祈る宣言をしているように思う。

## 二

犀星のへたちまちにして燃える感情は詩作する発想の根源となるものようだ。『室生犀星氏』の前後のエッセイ、詩には〈炎〉〈光〉〈燃え〉の表現が際立って目に映る。その条りをあげてみると、大正三年二月「詩歌」に発表した『金属種子』のなかで、

リズムはつねに炎である。一種のラインかと思ふほど透徹

である。対象そのものの感動が久しく時日を経由してまでも、えんえんとして燃えてゐる。(中略)

彼女の肉体に手指を触る時程明らかにリズムを感ずるときはない。彼女の豊麗な総ての部分に属するものまで悉くリズムだ。彼女がゴーホの炎になる。

また、

朝はしづかに麵麩を切る。(中略)そして其の麵麩をたべ終ると好きな火を、どんどん燃やして、うつとりとして好きな聖書を黙読する。(傍点菊地、以下同じ)

大正三年三月「詩歌」に発表した全二十六行の詩『玻璃を食む人』の冒頭に

街かどにかかりしとき

坂の上ならんと日は落ちつつあり。

円形のリズムはさかんなる廻転にうちつれ

樹は炎となる。

とあり、十六行にへいんいんたる炎なり。、十八行にへただ踊りつつ涙ぐむ炎なり。と表現は重ねられる。

大正三年六月「詩歌」に載った五連から成る『合唱』の第一連に

坂はびろうど夕日炎、炎

坂はみどりの下り坂、夕は祈りの鐘が鳴る。

とある。

大正三年四月「詩歌」に書いた『祈祷』にもへ地上は炎、炎、

断である、(深夜しんに深夜、私のソオルはえんえんとして燃えあがる)の表現が見える。このように辿って観取できることは、充たされない心の悩みの反動を、燃えあがる本能を(炎)で表徴しているように思う。そして(炎)のように燃えあがり、躍動する感情を、宗教的な祈りに近似したかたちで詠っている。『坂』、『道』の詩はそのような意思による求道的な性格が顕われている。祈りの意思是、宿命的な、貧しい心の反映なのであるが、犀星のその心情と感覚は現実の時間に触れる。犀星は小説『性に眼覚める頃』『或る少女の死まで』などで、虐げられた人びと、酒場で働く少女、転落した女性を対象化し、優しい人間性をもった視線で描いた。そしてその描写する内に犀星の個々の体温が息づいていた。つまり犀星の強い意思と感情が移入されているということで、人びとへの祈りは己れへの祈りと表裏の關係で上昇してゆく。

それは『聖書』に向う姿勢にもいえることである。前に引用した作『祈祷』で、

毎日毎日バイブルを読みくらしてゐる。読んでも飽きたることの無いものである。好きな好きなクリスト。センチメンタルでわがままで温和しくて女のやうなクリスト。すこし嘘つきで真摯なクリスト。柔らかな乳白の頬にしんみりと接吻がしたくなる。しかし、私はいかれの友人として喜びをおぼえるが決して使徒ではない。彼れは熱から熱を彷彿した人だ。熱以上熱以下に出入れなかつた人だ。軽率な深刻と背景はかり

創つた生涯の人である。

という。クリストを特殊化しない。凡俗な生活者と見ていて、犀星の日常的な感覚と心情で捉えている。対象をどのように享受する方法で心情の昂揚をはかるのである。

大正三年頃、犀星と山村暮鳥は萩原朔太郎からドストエフスキイを読むことをすすめられ、犀星が心酔したことはよくいわれている。詩『ドストエフスキイの肖像』は、(深大なる素朴／耐へ忍んだ永い苦しみ／鈍い恐ろしい歩調で迫る君の精神)にはじまる全三十三行からなるが、九行から十六行は、

悩んだものの美がある

強いねんばりした人間性

ねちねちした生命

無窮な憐愍 あゝ 寛大

肩はばの広い おこりつばいやうな此人

この人は迫る

温かい呼吸で迫る

あなたは貧乏に打勝つた

と、苦悩に耐えた生活を人生的に「審美的」(伊藤信吉)に称揚している。そして二十七行から(我慢に我慢をかさね勉強をしる／どのやうな苦しみも此人の前では誓へる／この人は万人の物だ／万人の魂に根を張つてゆく大地だ／誓へ／ほんとうによく生き／よく勉強してゆくことを おおと歌つて閉じている。犀星は明らかに己れの感覚にひきよせて生活者として貧しい心

を日常の感覚で、人生的に歌っている。ドストエフスキイの苦惱の心理、存在の不条理を捨象して、ひたすら生活の生の規範のよりどころとして祈禱し、精神的な昂揚を歌っているのである。

### 三

室生犀星には幼年時代から青年時代を扱って描いた『幼年時代』『性に眼覚める頃』『或る少女の死まで』の作品があり、それによって小説界に進出した。大正八年五月「文章世界」に自伝風の『抒情詩時代』という小説を発表した。この作品は「その後」に書かれた「性に眼覚める頃」（大正八年十月「中央公論」に発表）に重なる思春期を自伝風に描いた小説である。つまり主人公〈私〉は俳句に始まり、文章の魅力、文章の力を知り、自然を見、感性を満足させる美を求めてゆき、ひさとの幼い恋愛を経て文章めいた詩を作る。文学への眼覚めと遍歴をテーマとして描いている。十五歳の少年時代に俳句をつくっていた〈私〉は、美しく愛すべき存在は、生きた精神によって表現されるべきであると思っていた。写真が精神を深徹していた。そして俳句の世界に〈私〉のすべての情操や自然が詠みつくさるることを信じ、詩人らしい心持によって生涯の仕事を委ねたいと空想していたという。文章を書き、情熱を物語ることを愛した。夕方の散歩を愛し、煙草をのむことに人知れぬ快樂を感じ、

煙草をふかす仲間に〈私〉が詩や俳句を作っていることが知られていて、尊敬に近い感情がもたらされてきたことに誇りを感じていたとある。無頼と創作に〈私〉の個の存在を顕現していたことが描かれている。

「少年世界」の巻頭の自然描写に惹かれた〈私〉は身体的な感覚へのひろがり

さういふ季節には文字通りの春光は野や山や空を覆うてゐた。植物性の発散する芳ばしい匂ひは其処此処の草場や丘のあたりや、土手の重なり合ったところから漂うて来た。まるで少年等の私どもの、感じやすい五体のすみずみにのびのびとした感覚と、また一面には物懐かしい、何かを抱き締めたいやうな、情慾的な悩ましさを吹き込むものやうでもあつた。

私はさういふとき、あたまのくらくらするまで強く煙草を吸つたものであつた。あたかも酒をもちある人々のするやうに、このあやしい煙料の刺戟と眩惑とは、幾分の慰さめとなり、気の重くなるやうな悩ましいものを発散させるに力あつたのである。

という。北国の春の自然の生気が呼び声となって〈私〉の感覚や官能を顛わせ、性の眼覚めとなつて悩ましくひと恋しくなつてくるということなのである。

また新聞や雑誌の口絵の女の顔を写すことが快樂の一つであつたという。貸本屋に出入りし、俠客伝や盗賊物やお家騒動

などを借りては、凄絶な美しい女を写した。〈あのふつくりとした顔の肉線や、鼻の快よい高まりや、涼しい美しい眼などを、うすい美濃紙の下から、ほんやりと浮んでくるのを写し取ることの面白さ楽しさは忘れられなかつた。〉と快楽の秘密を明かす。それは肉体上の凄絶な美から味わう痛切な快感なのである。美しい唇元に短刀をくわえた女、薙刀を使って敵と斬り合う女の袖口から出た腕、裾短かな足元、細々した足の指など写し取りたいという本能的な欲求に迫られ、同時に〈美しく勇敢な女が生存してゐた時代を、実に立派な時代のやうに思つてゐた〉とあつて、しかも〈普通の女の人よりも、もつと別な美しさ優しさに富んでゐて、殆んど完全に近い優秀な女性のやうに思はれる〉と意識は高まり、

私は、烈しい情慾に顫へながら、さうした絵画の女の腕や唇に、吸ひ入るやうな接吻をしたものであつた。

とあるから、その官能による美の憧憬は旧時代の土着的郷土的な感覚に由来して、洗練された都会的感性とは遠いといえる。

また芝居もそのころから見はじめたという。〈東京から酒井某とかいふ女形が来てゐた。私はこの役者が非常にすきであつた〉、白い襟首や黄味がかつた体の色に、紅裏の女衣裳の色彩の交錯するのを見て、〈これまで見たことも感じたこともなかつた、誘惑的な刺戟的な色感にとらえられる。そのような酒井に、〈恋しげな感情が満ちて〉きたり、〈娼婦に対するやうな心でゐた〉ことがあつたという。そういう〈私〉の感情感覚は

〈いんいんたり〉と歌つた、内なる充たし得ない心を反動的に味わう快感なのであるといえる。

やがて芝居も写し絵も母や姉に禁じられ、学校に通い、文章を投稿しはじめた。雑誌の賞牌としてハート形の銀のメダルを得た。

生れて初めて自分の仕事によつて報酬された此美しい銀のメダルは、私にとつて最も秘蔵すべき十字架のやうに貴重なものであつた。

とある。そのメダルを登校の途中でよくゆき会うひさに〈与へようとする心〉に燃え、〈それは恰度、凡ての愛する者に贈り物をするといふことが、特に深い意味でなくとも、さういふ好意が起りがちなやうに、私もこの記念すべきものを彼女に与へようと思ひ、文章の賞としてメダルをもらつたことを告げて、ひさに与えた。〉私 は、〈女性に与へるといふ柔らかい意味だけを喜んでゐた。〉このやうな喜びを、金沢の風土を背景にして、木々が芽生えて成長することきひさとの恋を、描いている。

私はいつも彼女の中に、いつばいに清浄なものや、初々しい艶めいた静かな声音や、神々しい美しさが住んでゐるやうに思はれた。いまから思へば、それは清純な濁りない心からの求愛の芽生えのやうなものであつた。

と、ひさとの恋を美化した上昇の気持を追憶している。そのような昂揚した気持は詩や文章を〈私〉が書くごとに力を増していつた要素的なものであつたことも表現しているのである。口

絵の女への執着と拘泥の快感からひさへの恋、その恋の芽生えと成長は、《私》の詩人として成育してゆく史であることが描かれている。

《私》のそうした上昇する気分的な主観は、すでに新聞雑誌の口絵を写し取るときの気分にもみられたが、その主観は《私》（扉星）において自然の理法を想像させるような、粘着力を帯びて、無頼の心情を形成してゆくのであり、また一方聖性を胎してゆく働きをしてゆくのである。その二側面は『幼年時代』『性に眼覚める頃』『或る少女の死まで』に結構された。

#### 四

大正八年九月「文章世界」に「自叙伝の一節」として『一冊のバイブル』を発表した。《私》の文学の修業時代を扱った作品である。《私》は下宿へ引き移って間もなく、押入の隅に一冊のモロツコ皮のバイブルを見つけた。不意にものを贈られたような嬉しさの反面、運命を指摘されたような不安と恐怖を覚える。《何か知らあるものに予言されるやうな、心をつき刺すものがあつた》とあるが、作品のなかにはバイブルについて、引用や具体的な内容の言及はない。鈴虫の籠も押入にあった。虫籠もバイブルも前にこの部屋にいた《耶蘇教の学校へ通つてゐた》姉妹のものとわかり

二人の若い女性の住んだ室と知つてから、私は押入や戸棚

や、畳のまはりや、窓の闕などに今まで気附かなかつた或る感覚的な懐かしさを感じた。（中略）押入の内部にちつと顔をつき込んで、目を閉ちてゐると、女の着物や夜具類につきまとふ匂ひが、まだその中に消えながらに残つてゐた。ことに肉体のかをりとても云ふものよりも髪匂ひがはげしく籠つてゐることを知つた。

とし、バイブルを女がさがしにくるかもしれないと思つて隠しておく。女性への感覚的な空想を増幅させ、抒情をにじませてゐる。

がそのバイブルを手放すときがやつてきた。《私》は父の死の知らせで北国行の汽車に乗る。二二三の女性が、自分は窓の方へ寄つて席をとつてくれた。《堅気な家の小間使ひ風な、おちついた、言葉のていねいなところがあつた》、《中肉な、眼を細めてやさしさうに瞬かしながら物をいふ癖》があるその女と言葉を交す。《私》は善良な父の生涯を考え、十年近くも《一人前の人間》になつてくれるやうにと送金してくれたことを思い、ほんやりと女の手をみつめると、荒れているが《圓みや光澤をもつて蒼白く澄んでゐた》ときおり悲しうに細い目をまたたくのを見ていると、

二人が一つの椅子に腰かけ合つて別々な運命を隣り合せてゐて、それが両方の心で堅く護られてゐるのを不思議に考へた。それは私とか女とかいふ人間のなるものよりも、二つの運命がそこに呼吸してゐるやうにさへ思はれた。

と、運命に向けておたがい苦しみ耐えしんでいると認識し、憐みと共感を〈私〉はもつ。住所を明かし別れたが、女のうしろ姿をながめながら、〈私〉は寂しい気がした。まつわりついている倫落的なものが目に見えるようだったと、背負った辛苦に〈無窮な憐愍〉を寄せる。〈私〉は父の死後、かねて話のあった女性と見合をして帰京した。処女詩集の出版もでき、友人や先輩から祝福された。本が何十人のかくれた努力と誠意によって出来るということを見出し、人間の連帯感を痛感する。詩集の巻頭に父にデヂケエトする言葉をかき、〈私〉のためにドストエフスキイの言葉「苦しみあがきし日の償ひに」を記したという。列車で隣合った女性から手紙が来た。〈浅草区角町等松方〉とある。来合せた友と地図を抜けたが町名は見当らない。〈こんど恥かしながら勤めをすることになりました。いちどこちらへ来る前にお訪ねしようと思ひながら叶ひませず〉とあり、友は地図から角町が吉原にあることを見つけてくれた。私は書棚からバイブルを取り出す。

いまこそこれを返さなければならぬやうな気がした。あの女のひとが読まなくとも、持つてゐてくれるだけでいいと考へた。芝居がかつていやだった、私にはこれより外に彼女に言葉を通じることはいやであつた。

バイブルを拾ったときの〈私〉の貧しさを考え、小包にして送つたということであるから、耐えて生きる人間への〈私〉の共感と愛憐に、犀星の肉感的な感情移入が刻まれていることになる。

またバイブルを見つけたとき嬉しい気がしたと同時に、運命を指摘されたような不安と恐怖を感じ、予言されるやうな心を刺すものがあつたとあるが、吉原へ行つた女の不仕合せを、バイブルを送ることでささえることが、ある種の「宗教的な情操」(伊藤信吉)を意味するものであるとすると、犀星の愛の質が考えられてこよう。が、先に述べたようにバイブルの聖句には触れていないから、キリスト教的な人間性を強調する意図があつたということは難しい。『ドストエフスキイの肖像』で思つた、耐え忍んで大地を生きて行く気迫への共生が核であると思えてくる。が、「一冊のバイブル」を精神的ささえと読むことも、その作中の扱われ方を考えてみた場合、難かしい。技量が問われる。作品の核が定まらないのである。

また、技量の問題と関連して、作中、一通の電報がきて「三年越しに病んでゐた父がたうとう死んだことがわかつた」と書いたあとで「私は郷里の自宅で死に類してゐる父にあつた。父はもう意識がなくなつてゐて、三日目に静かに逝つた」という叙述がでてくる。作家としての粗さが思われる。

しかし「抒情詩時代」「二冊のバイブル」が伝えてくるのは〈私〉の心の貧しい傷みと、耐えて生きてゐる人への温かい眼差しと愛憐である。それはまたこの時期に書いた「性に眼覚める頃」『或る少女の死まで』の作にも通じるテーマである。犀星の愛の心のたまものなのである。

(この稿未完)



註1 雑誌「文章世界」(大正八・五)

註2 雑誌「詩歌」(大正三・五)

註3 木戸逸郎著『ふるさと』は遠きにおいて——室生犀星詩伝(一九八九・三・二四、宝文館出版)

註4 別稿『幼年時代』「性に眼覚める頃」『或る少女の死まで』の再吟味』を参照されたい。

註5 註3と同じ著書。

なお伊藤信吉解説「犀星の三詩集をめぐって」、北川透「作家案内―室生犀星 詩人室生犀星」(文芸文庫『抒情小曲集・愛の詩集』一九九五・一一・一〇、講談社)を参考にした。

テキストは、詩『ドストエフスキイの肖像』を除いて、すべて初出誌によった。